きずな

目次

February 2016 No.20

巻頭言

新体制移行に期待して　加瀬　正裕　4

『きずな』第20号に寄せて　島田　晴雄　5

経営計画の実現と事務局の役割　～『きずな』第20号に寄せて～　露崎　洋　6

『きずな』創刊20号記念特別企画

『未来に帰った留学生たち』が考えるCUCの未来
―同窓会の新しい活動課題に向けて―
座談会：星野　喜宏／加藤　弘樹／半澤　広幸／宮坂　清佳／山川　司／濱野　和人（司会）　7

卒業生・同窓会と大学との連携　瀧上　信光　16

千葉商科大学同窓会情報誌『きずな』バックナンバー　内田　茂男　19

20号を迎えた『きずな』　24

特集

同窓会活動の新しい課題　岩崎　勝彦　26

活躍する卒業生

地域密着の基礎と実践　豊田　光弘　29

同窓会活動

本部からの報告　広報・IT委員会　32

定期総会 ホームカミングデー 懐かしき想い出工房開催　広報・IT委員会　32

第14回支部長会定期総会開催　広報・IT委員会　33

第46期第1回理事会　広報・IT委員会　34

「懐かしき想い出工房」開催　濱野　和人　35

同窓会交流会　菊池　隆　36

体育会OB会活動報告　金網　栄一　37

教育研究会活動報告　近藤　真唯　38

支部からの報告　42

同期会からの報告　46

同期会からの報告　52

OB会からの報告　53

同窓生寄稿　53

瀬戸内しまなみ海道80kmを歩く　牧野　靖信　55

大自然 山仲間との出会い ～日本百名山を登りおえて～　菅藤　満昭　59

卒業生のお宿・お店紹介『柚』　髙橋　伸治　59

CONTENTS

追悼文

中澤興起先生のDNAを受け継ぎます！ 勅使河原 隆行 60
わが師、中澤興起先生のご逝去を悼む 近藤 真唯 62

教育後援会活動

CUC教育後援会の変革について 宮下 律江 64
経験という財産 嶋田 容子 65
大学の進化と子供たちの地域貢献 清水 俊洋 66
半世紀ぶりの縁 竹田 修 67
―信ずる者は救われる―
独断と偏見・就活生を元気にする学内3大パワースポットをご存じですか？ 川瀬 功 68

随筆

あ～夢 歌で 世界へ 宍倉 明美 70
路地と池の歳時記 伊藤 雅敏 71

CUCの教育

学生自身の声から生まれるキャンパスライフの可能性 枡岡 大輔 73
―キャンパスライフセンター・コンシェルジュの挑戦―
政策情報学部『省エネ・創エネプロジェクト』 80

■ニュース・イベント

「瑞穂会」が全国大学対抗簿記大会団体戦でトップ3独占！ 81
政策情報学部藤井玲さんと中野雄太さんのライブペイント×インタラクションが 81
「みなとみらいプロジェクト実行委員会賞」を受賞！
商経学部杉田ゼミ生が日本地下水学会主催の2015年春季講演会で 82
若手優秀講演賞を受賞！
人間社会学部生が地域の魅力を総力取材！『るるぶ～千葉商科大学人間社会学部Vol.2～』完成 83
本学学生制作の映像作品が「いちかわイイネ！映像コンクール」でジェイコム市川賞を受賞！ 84

CUCレポート

■メディアで紹介されたCUCの報道一覧 85

■地域連携推進センターニュース

「日経グローカル」地域貢献度ランキングで躍進 89
瑞穂会館4階に「地域交流スペース」（仮称）を設置 89
市民に開かれた大学としての活動 90
「学生ボランティア活動報告会」開催 90

著書紹介

『新・日本経済入門』 内田 茂男 91
著者：内田 茂男／三橋 規宏／池田 吉紀

CUCサポート

CUCオリジナルワイン・ポストカードを開発 92

▼同窓会支部事務局一覧 94 ▼編集後記 96

■巻頭言

新体制移行に期待して

加瀬 正裕 ● 千葉商科大学同窓会前会長（昭43 経済）

このたび同窓会会則改正を中心としたところに組織改革の肝を注入し、体制刷新により臨む第46期はスタートしました。即ち、同窓会の仕組みとしてステージが変わりました。この切り替えの節目にあたり、私は一線を退き、新体制に改革の意図を委ねることといたしました。大変お世話になり、ありがとうございました。

今回、改革の主眼が活動単位の多様化を見据えるとともに、会員活動の参加を促し、ひいては財政基盤の確立に願いを掛ける取り組みです。

そこには多くの卒業生の皆様からの同窓会維持会費納入の支持を基に活動力を高め、その線上において事業計画の円滑な推進がなされることへの期待がかかります。何事も高みを究めるには「裾野が広くなければ山は高くならない」になぞらえます。

次に、重要な改革の一つに役員構成を担うためには自ら手を挙げて認否を問う立候補制を導入したことです。

こうした観点に立つならば、同窓会組織は〝母校に思いを寄せる卒業生の積極的善意の集合体〟と申せます。

今日、千葉商科大学は前身の巣鴨高等商業学校創立以来87年の歴史を刻します。今日に至る間には幾多の困難を乗り越えてまいりました。言わば円熟期に入った大学の一翼を担うものです。

こうした中、環境の変化に対応する新体制にあっては、今期を新会則完全施行前の移行期と位置づけ、特例措置の下に組織運用を図ります。役員任期は1年です。新会則の厳密な適用は来期であり、今期はその準備期間です。一線を離れる者がいささか申し上げるのははばかりますが、改革に臨んだ狙いに鑑み、適正な対応をしていただくことが望まれます。

〝裾野が広ければ山は高くなる〟を以って組織の高みを願うとともに、併せて「人は石垣、人は城、人は堀」の詞に人のつながりの大切さを感ずるこの頃です。

■特集

同窓会活動の新しい課題

岩崎 勝彦

千葉商科大学同窓会会長
（平19 大学院会計ファイナンス研究科）

岩崎 勝彦（いわさき かつひこ）

大学卒業後、大手銀行に入行。約37年に亘る国内外勤務を経験。平成20年より大学で教える傍ら、同窓会副会長を経て、昨年会長に就任。平成13年中小企業診断士、平成19年千葉商科大学会計ファイナンス研究科修了。

第46回定期総会で新会則が承認され、それに伴い同窓会組織は新役員メンバーで発足しました。今般は、すでに10月から新事業年度に入っていましたが、総会での承認を得ることを優先しましたので、多少イレギュラーな対応となりました。新会則の詳細はホームページに掲載していますので、ここでは会則変更に至った経緯を述べたいと思います。

まず同窓会活動の現状認識は、残念ながら以下の状況が挙げられます。

① 卒業後、維持会費納入者の低迷
② 正確な名簿管理が追い付いていない（新規加入、追跡調査、個人情報の壁）
③ 同窓会各種会合への出席者の固定化・高齢化に歯止めがかからない
④ 同窓会活動に対する若い世代の不参加、無関心の増加

特に③④に共通する背景には、卒業生や現役学生のニーズ（年齢を問わず）に対し、同窓会活動が応えきれていないことがあると思われます。

例えば、卒業後、人事異動や転居後、親しかった友達や先輩に対し、何らかの事情で連絡を取りたいと思った時はどうでしょうか。残念ながら現在の同窓会（あるいは大学当局）では、正確な情報をほとんど提供できていない、というのが実情です。その結果、同窓会の意義・役割が薄れ（つまり利益実感がない）、同窓会活動に何の魅力も関心もなくなる、といったことの繰り返しが今日の低迷を招いたと言わざるを得ません。

つまり、前記のような問題は、表面的には会員情報管理が不十分であったことにありますが、その根底には入会金や維持会費未納者に対するフォローが出来ていないこと、さらに次第に維持会費振込み意識が低下することに繋がっています。そのほか、県支部中心の活動の活性化のための本部支援不足、或いは世代間のコミュニケーション不足、といったことも会員数や維持会費の低迷に陥った要因といえるでしょう。

同窓会本部でも、このような環境変化に対し、約3年間の会則見直し作業を経て、以下の改正内容を目指すことにしました。

1. 正会員の定義を見直し、維持会費の納入の強化を図る

会費（終身会費・入会費・維持会費）の未納者と既納入者間の不公平感をなくすため、会員動向の正確且つスピーディな把握をするための重点方策に取り組む。これにより、同窓会への参画意識をより一層明確にし、同時に財政基盤の安定化を図る。

2. 次世代を担う若手会員のみならず、専門知識を持った人材を広範囲から登用し、様々な活躍の場を増やす。

3. 予算の硬直化を見直すと共に、会員数増強の具体策を強化する

例えば、本部・支部からの連絡無回答者に対するルールが不統一なため、無駄な費用が都度発生。ルール統一などで予算の効率化に着手すると共に、会員数増強のため各種人脈・ネットワーク構築を進め、同窓

会全体でお互いに声掛けを依頼する。

なお、これらの具体策の進捗については、ホームページなどを通じてお知らせしていく予定です。

大学を取り巻く環境は益々厳しさを増していることはご高承の通りです。しかし、留意すべきは、学生数の減少・大学数の増加という一般的な事象のみならず、大学ごとの個別の事情をよく調べることが必要であることを意味しています。

その中で同窓会として支援できること、さらに後進のために何をするべきか、を模索していくことが必要です。大学との関係は単に卒業後に始まるのではなく、現役学生時代から、大学と両輪の形で協力・支援していくことが本来のあるべき姿と思っています。

千葉商大は、全国有数の社長輩出校でありながら、県支部との連携や職域ネットワークづくりに活かされていないのが現状です。その結果、維持会員の増加にまで繋がっていません。

これらの問題については、以前から指摘され、同窓会としても努力を重ねてきましたが、今日の状況に至っていることは残念ながら前述の通りです。

以上のような事情を考え、今期の同窓会の事業計画の基本コンセプトを「千葉商大のプライドを取り戻そう」としました。

同窓生がいつまでも「千葉商大の卒業生」としてのプライドを維持するためには、同窓生自身がまずプライドを取り戻し、同じ目線で学生達を見守り、育てる気概が必要とされているのではないでしょうか。

様々な分野で活躍されている同窓生諸氏がさらに現場で輝き、また将来の卒業生がその後継者として先人達の後を追えるような「千葉商大のプライド」を今一度取り戻したいというのが我々の想いです。

人材育成は決して他人事ではなく、我々卒業生一人ひとりの責務であることを今一度思い起こす時期だと思います。

皆様の新たなご支援を期待して、新会長就任のご挨拶とさせていただきます。

地域密着の基礎と実践

豊田 光弘
真岡信用組合常務理事
昭和53年3月 商経学部経営学科卒業

私は昭和53年3月に千葉商科大学商経学部経営学科を卒業しました。今回私が所属しています同窓会栃木県支部定期総会会場において、同窓会情報誌『きずな』の「活躍する卒業生」コーナーに書いてもらいたいと、同窓会本部の方から依頼を受けました。先輩の依頼は絶対でありお引き受けいたしましたが、何を書いていいのかわからず悩みましたが、4項目について書かせていただきました。

番場ゼミ

大学4年間で何が今でも心に残っているかというとゼミであります。番場学長が本大学で初めてのゼミを受け持つということで、どうせ勉強するならと学長ゼミに申し込んだところ運よく希望通り入ることができました。

ゼミのテーマは「企業会計原則」で公認会計士や税理士を目指している学生もおり、ゼミは番場学長の厳しさの中にも温かみのある授業でありました。また、ゼミの

小旅行も何度か実施され、勉強に遊びに本当に楽しんだゼミの2年間でした。番場学長からは、卒業時にゼミ生一人ひとりに先生の著書に言葉を頂きました。私は「呉越同舟の心 豊田光弘君 番場嘉一郎」と書いていただき、今でも大事に持っております。

真岡信用組合

卒業と同時に昭和53年4月、地元栃木県真岡市に本店がある真岡信用組合に入組しました。信用組合は明治25年静岡県内に設立されたのが日本で最初です。当組合は昭和27年3月に設立され、今年で63年を経過しました。

現在ある信用組合の多くは昭和27年から昭和30年までの間に設立されており、当時中小零細事業者の多くは銀行から融資を受けにくい立場の方が多く、そのような方々に対して地域経済の再生の一つとして設立され、相互扶助の理念に基づき資金を提供しました。

信用組合は全国に154組合があり、内訳は地域信用組合110組合、業域信用組合27組合、職域信用組合17組合と3つの業態から成っています。

真岡信用組合の平成27年9月現在の概要は、預金量840億円、貸出金338億円、店舗数6店舗、役職員約100名、組合員13626名、出資金5・4億円となっており、信用組合業界での規模は中位程度です。

本店所在地の真岡市は栃木県の東南部に位置し、自然環境豊かな8万人程度の地方都市であります。東京から100km圏内に属し、工業・商業・農業のバランスのとれた都市で芳賀地方の地方経済文化の中心的役割を担い、江戸時代には真岡木綿の特産地として全国に名を知られておりました。現在はいちご生産量日本一として、「とちおとめ」や新しい品種「スカイベリー」を作っており、またSLの走る街として知られています。当組合は、最も身近な金融機関としての特性（人縁・地縁を基礎とした密接な関係づくり・地域密着・足の金融機関）を発揮することにより多様化する社会の中で中小零細事業者や生活者の幅広い金融ニーズに応える態勢で臨んでいます。

私は、顧客や地域をよくしたいという思いを持っている役職員がどれくらいいるかで、社会の期待に応えられるかが決まると思っておりますので、今後も積極的に取り組んでいきたいと思っています。

CUC中小企業マネジメントスクール

毎年4月になると、千葉商大より中小企業マネジメン

トスクール募集要項が送付されてきます。このセミナーは人間社会学部鈴木孝男教授が立ち上げて今年度で19回目となっております。私は平成21年度の13回より参加させていただいて今年度で7年目となります。今年度のテーマは「中小企業におけるコミュニケーションの意義」となっています。5月より翌年の1月までの月1回、土曜日開講、全8回であり、教室は今年度は1号館で行われています。受講者は毎年約50名程度、第1部勉強会15時～17時、第2部異業種交流会（自由参加・飲食付き）17時30分～19時となっております。

受講者が真剣に学ぶ姿勢にパワーをもらい、特に第2部では講師を交じえ、参加者全員講師に対する質問や講義の感想を一口コメントとして発表します。通学に時間を要しますがそれにもまして、本当に楽しい時間を母校で持たせていただいています。

千葉商大と信用組合の産学連携事業

全国信用組合中央協会では、産学連携事業の一環として、全国の諸大学と提携し地域金融・経済等に関する講義を実施しております。

母校千葉商大においては、平成25年度より「地域金融論―信用組合の制度と役割」と題して秋学期全15回の授業が始まりました。私も講師の1人として参加させていただき、「地域社会と信用組合の実践」と題して地域金融の実際を講義しております。今年度で3回目となり、今年は11月24日に行ったのでありますが70名程度の学生が出席し、一生懸命メモを取っている姿勢を大変嬉しく思いました。今後も講師の依頼があれば続けていきたいと思っております。

最後に卒業して37年が過ぎました。現在いろいろな形で千葉商大とつながりを持てていることは私にとって大変幸せなことであり、これからも続けていきたいと思っております。

豊田 光弘

略歴：

昭和53年　千葉商科大学商経学部経営学科卒業
同　　年　真岡信用組合入組
平成16年　株審査部長
平成18年　業務部長
平成19年　常勤理事
平成27年　常務理事　現在に至る